

〔人間と文化 241～247 (2017)〕

# 読み聞かせの実践

## — 授業の検証と今後の展望 —

岡本千佳子<sup>1</sup> 岩田裕子<sup>1</sup>  
尾崎智子<sup>2</sup> 内田絢子<sup>2</sup>  
(<sup>1</sup>松江キャンパス非常勤講師・<sup>2</sup>司書)

Implementing Reading stories Aloud  
— Course validation and Future Prospects —

Chikako OKAMOTO, Yuko IWATA  
Satoko OZAKI, Ayako UCHIDA

キーワード：読み聞かせ、演習型授業、人間力

Keywords：reading to someone, practical lessons, personal character

### 1. はじめに

島根県立大学松江キャンパスでは、平成18年度より絵本の読み聞かせを取り入れた教育を行い、この取組を総称して「おはなしレストラン」<sup>1)</sup>と呼んでいる。この取組は平成27年度で10周年の節目を迎えた。平成28年度は新たな一步目である。

本稿では、おはなしレストランの取組のひとつである「読み聞かせの実践」の授業の現在を検証し、その目的である、知識・技能・実践の総合学習による、人間力の育成に貢献しえているのかを振り返り、今後の取組を展望したい。

授業の核であり、この振り返りの手掛かりとするのは、以下に記す「おはなしレストラン10か条」である。

1. 絵本よ、きょうもありがとう
2. 絵から文へ、文から絵へ

### 3. 自分の心で、子どもの心で

### 4. 聞き手にあった本選び

### 5. 季節に合った本選び

### 6. 絵本の持ち方、たいせつに

### 7. 絵本の読み方、たいせつに

### 8. チームワークも味のうち

### 9. あいさつ身なりも味のうち

### 10. みなさん、きょうもありがとう

※各条項の下位項目は省略した。

### 2. 概要

「読み聞かせの実践」は現在、前期は総合文化学科・健康栄養学科、後期は保育学科の1年生を対象とした専門科目（選択）である。各期の受講人数には、ばらつきがあり、最少6名、最多57名だが、おおよそ30～40名で推移している。

この授業は、以下の3か所での学びで構成されて

いる。

- ・学内「おはなしレストランライブラリー」  
読み聞かせについての基本の講義・選書・実践準備・模擬実践等
- ・幼保園のぎでの実践  
授業時間内に、ペアで、30分間、2冊の絵本の読み聞かせ（つなぎとよばれる手遊び等を含む）
- ・乃木小学校での実践  
授業時間外に、単独で、10分間、1～2冊の絵本の読み聞かせ  
実践の回数は、いずれの実践先も、一人当たり3回ずつである。

### 3. ライブラリーでの取組

#### 1) 絵と文

絵本の主となるのは、絵である。特に読み聞かせの場合は、聞き手である子どもたちは、まず開かれた絵本の絵を見、つぎに音として言葉を聞き、その両方を融合させて自分の中でお話を構築する。しかし、大人は絵本を読むとき、どうしても文章を重視し、絵は添え物のようにして読みがちである。授業では、まず「絵本とは何か」を考えさせ、つぎに実際に絵の読み聞かせをして、絵と文の持つ意味や、その補完作用・相乗効果と一緒に考える。その上で、まず絵本の絵を読み解く。絵だけでお話が浮かんでくる力があるか。そして、文章を読んだ時に、絵とお話にイメージの大きな開きや違和感はないか、文章がきちんと語りかけてきているかを大切な視点としている。

#### 2) 自分の心で

絵本を選ぶ時、「おすすめの本」リストなどを手掛かりに選ぶ人は多い。子どもに選ばれ続けてきた本を集めたリストは、非常に有用だ。しかし、読み聞かせはそこに読み手の感情が加わる。「読み聞かせの実践」では、まず自分の心に響く本を選ぶことを、とても大切にしている。このことは読み聞かせの質を大きく左右すると考えているからだ。そのため、この授業では、あえて「おすすめの本」のようなリストを用意していない。学生が実際に手に取っ

た絵本の中から、「この本が好き、だから読んであげたい」という思いをもって、読み聞かせできるよう、選書から実践までをサポートする。

その一つとして、選んだ本について「あらすじ」「好きなところ 子どもに伝えたいところ」「読み聞かせをする際に工夫したり注意したりする点」をまとめる「作品解釈ノート」がある。このノートを書くことが、自分の気持ちと絵本に向かう姿勢を明らかにする助けとなる。

実践では、自分が選んだ絵本の読み聞かせに、子どもたちが目を輝かせて聞き入る姿を見て、子どもと絵本の世界を共有できた、という実感を得る。そして「自分の好きな絵本を読んでいいんだ」と気づく。好きな絵本を読むことで、学生と子ども、どちらも読み聞かせの楽しさを知るのだ。

#### 3) 子どもの心で

異年齢との接点が少ない学生たちに、子どもの心をイメージすることは難しい。そこで、前述の「作品解釈ノート」をもとに、絵本とその向こう側にいる子どもについて考えることで、一定の効果を上げている。しかし、学生が子どもならではの視点を強く感じるの、やはり実践である。「模擬では（学生たちが）みんなすごく笑ってくれたのに、子どもたちは最後まで真剣に聞いていた」「わたしたちが当たり前と思っているところで、思ってもいない突っ込みがあった」など、学生たちは戸惑い、原因を考え、生きた子どもの心に触れる。これはスタッフ（担当教員・司書）が、学内でどんなに一生懸命説くよりも大きな学びになる。

ここで大切になるのは「なぜ」という問いかけとその深め方だ。せっかく子どもたちから学びにつながる反応があっても「子どもたちが落ち着かなくて、聞いてくれなかった」「つまらなそうだった」という感想で終わっては、深まらない。「なぜ、どうして」と実践を振り返ることで、子どもならではの絵本の受けとめ方を学んでいくのだ。

子どもに伝えたいこととして、道徳的な視点を挙げがちな学生も、このようにして、子どもの心に響くとはどういうことか、理解を深めるにつれ、子ど

もが受けとるであろう、お話の面白さ、中に秘められた力や希望、成長の喜びや、絵本の芸術性などに気づく。

#### 4) 聞き手にあった本選び

子どもに楽しんでもらえる本を選ぶためには、対象の子どもをよく知ることが重要だ。しかし、学生には、読み聞かせの対象となる子どもの発達・考え方を推測するのは困難である。選書の際に一番多い質問は、自分が選んだ本が、実践の対象に合っているかどうかだ。この質問は、特にライブラリーでは年齢別の配架方法をとっていない、3歳から小学校の中学年までの選書の際に多い。これに対しては、基本的に学生の「読みたい」という姿勢を重視している。実践で、合うか否かを感じ取るのも、大切な学びだからだ。

ただ、開館時2,317冊だったライブラリーの蔵書<sup>2)</sup>は、現在14,610冊に増えた。選択肢が増えたのはよいが、限られた時間の中で大量の本を目の前にし、選びきれないまま模擬実践を迎えたり、選書をスタッフに頼ろうとする学生もいる。「自分の心で」選ぶことの妨げにならないようにしながら、子どもたちの心身の発達に合う本を、納得して選ぶためには、どうしたらよいか模索中である。

#### 5) 聞くこと

読み聞かせをする上で、非常に大切になるのが「聞くこと」である。聞き手である子どもたちは、どのように絵本を受け止めているのか。学生が互いに読み聞かせを聞くことにより、子どもの追体験が可能となる。

「読み聞かせの実践」開講時の授業では、学生の実践の回数・間隔が不定期で、幼保園と小学校の実践日が連動していなかった。そのため、学内での実践準備が煩雑で、学生同士で読み聞かせを聞き合う時間が十分確保しづらかった。そこで、H28年度から、受講人数にかかわらず、実践回数を3回ずつに定め、実践日も連動させることにより、学内での活動が整理され、聞く時間を確保できた。

模擬実践を聞いている学生から「森の中を歩いて

いる気がした」「すごく寒かったのに、おひさまが出てきたところでぽかぽかした」などという声を聞くことがある。この「読み聞かせの体感」は、前述の「子どもの心で」読み聞かせするための貴重な体験である。

#### 6) 読むこと

学生が納得した選書ができたら、その本を生かすための読み方や、持ち方などの技術が必要となる。これは、模擬実践でその意識を高めることができる。

読み方については、ゆっくりはっきり読むことで、お話が確実に子どもたちに届きやすくなる。また、お話を自分の中できちんと消化し、絵とお話に即したイメージを豊かに持つことも重要である。それができれば、読む速さや表現の仕方、間の取り方が自然と変わってくる。

子どもたちから見やすく、読み手が読みやすい高さや持ち方、ページのめくり方などは実際に見せることにより、学生たちはその方法を吸収し、自信をもって子どもたちの前に立てるようになる。

また、子どもの様子を見ながら読み聞かせをすることも重要だ。読み聞かせ初心者の学生にとって、子どもの様子を見ながら読むのは難しく、本ばかり見ながら読みがちになる。模擬実践で「自分だけの世界で読んでいる」と指摘されたある学生は、「人に読もう、子どもに読もう」と意識し続けた。このように意識することで、少しずつ前進が見られる。これができるようになると、つぶやく、笑う、といった反応はもとより、声に出ない反応もつかめるようになる。

## 4. 小学校での取組～実践を中心に

### 1) 「声を発する反応」と「声に出ない反応」

実践を重ねていくにつれ、笑う、つぶやくなど「声を発する反応」が返ってくるような、楽しい絵本ばかりを読みたがる学生が出てくる。そのような絵本は、聞いてもらえたという実感があるため、学生の満足度も大きい。「子どもが反応してくれて嬉しかった」「他の学生が楽しかったと言っていたから、自分もそういう絵本を読みたい」と言う学生もい

る。しかし、学生には、子どもの「声に出ない反応」にも目を向けてほしい。絵本の中には、じっくりと聞かせるお話も多く、子どもは大抵静かに聞いている。子どもは、決して退屈しているわけではない。真剣な眼差しを絵本に向け、集中している姿が多く見られる。子どもは、自分の心でお話を受け止め、「声に出ない反応」を読み手に返しているのだ。そのことに気づいた学生は、子どもの「声を発する反応」も「声に出ない反応」も受け止め、子どもと一緒に楽しんで絵本を読むことができるようになる。

## 2) 評価用紙の是非

H24年度まで、小学校の実践では、実践の度に担任の先生に書いていただく「評価用紙」を導入していた。これは、「読み聞かせについて」「子どもに向かう姿勢について」「態度・マナーについて」の3項目に対して「◎・○・△」の3段階で評価してもらい、簡単なコメントを書いてもらうものである。多面的評価を目的として導入していたが、H25年度に取りやめた。小学校の先生からは、時に「道徳的な絵本を読んでほしい」「朝から暗い内容の絵本は読まないでほしい」といった意見が寄せられた。「評価用紙」があることで、読み聞かせを楽しむより、学生への評価を重視してしまう先生もいた。しかし、先生には、まず子どもと一緒に読んで読み聞かせを楽しんでもらいたいと考えたからである。

「評価用紙」をなくしてから、クラスの様子に変化が見られた。子どもと一緒に、リラックスして読み聞かせを聞いてくださる先生が増えたのである。先生の読み聞かせに対する姿勢は、子どもの聞く姿勢にも影響する。先生が楽しんでいると、子どもも自然と集中してお話を聞くのである。これは、学生にとっても、大きな励みとなる。

一方、幼保園では、現在も「評価用紙」を採用している。保育学科の学生にとって、保育現場からの意見は、参考となるものも多い。しかし、小学校での読み聞かせの様子を見ると、評価用紙の是非を問わざるを得ない。今後、幼保園と、評価用紙の是非について検討していく必要がある。

## 3) 実践で育つ社会性

小学校の実践は、水曜日の朝8時20分から10分間、授業時間外に行っている。早朝、現地集合であるにも関わらず、ほとんどの学生が時間通りに集合する。ライブラリーで行う授業では遅刻しがちな学生も、例外ではない。また、初めは、自分から挨拶をすることができなかった学生が、実践を重ねるごとにできるようになるなど、変化が見られることも多い。実践を通して、先生や子どもたちと関わる中で、「おはなしレストラン」の一員としての、自覚や責任感が育ってきていると考えられる。

また、ある学生は、実践を振り返って「一人前ではない私たちの読み聞かせを聞いてくれた子どもたちや、実践の場を与えてくださった先生方に対して、きちんと準備をした上で読み聞かせを行うことも感謝を伝える方法だった」と述べていた。学外で活動することや、人前に出ることの意味を考えて行動することによって、責任感や感謝の念が芽生えるのである。これは、実践の場に限らず、日常生活を送る上でも必要だ。人との関わりを通して、こうした社会性を身につけることも、実践での重要な学びだと考えている。

## 5. 幼保園での取組～実践を中心に

### 1) ペアで育つ人間力

幼保園のペアは、くじで決定する。そのため、ほとんどの学生が、普段接することのない相手と、選書から実践までを協力して行う。

準備、実践と順調に進むペアもいるが、「意見が合わない」「意見を出してくれない」など、相手に不満を持つペアもいる。そこで、お互いを尊重し合いながら、いかに自分の意見を積極的に出せるかが、重要である。実践は1人ではできない。子どもたちの前に立つために、お互いにやりとりをしながら、どうすれば、実りのある実践ができるかを、準備と実践を繰り返す中で学んでいく。

この授業では、全員が、ペアの変更もなく、最後まで授業をやり遂げてきている。「1人でやるより2人でやる方が大変だった。でも子どもたちの笑い声を聞くと、頑張ることができた」「実践は楽しかった

たけど、準備をするのが面倒だった。でも、ペアの子が声をかけてくれて、私もちゃんとしようと思った」これは学生の感想である。ペアと向き合い、子どもたちに支えられ、実践をやり遂げた力は、これから生きていく上での人間力にも、大きく関わっていくだろう。

## 2) 学生の苦手意識の変化

この授業には、人前に出るのが苦手な学生も、少なくはない。それを克服するために、この授業を受講する学生もいる。

ある学生は、人前に出ると緊張し、声も小さく、人と目を合わせることも苦手だった。幼保園の実践では、「つなぎ」と呼んでいる、手遊びやクイズもする。その学生は、初回の実践に、手作りのクイズを用意して実践に臨んだ。子どもたちは、学生の問いかけに、わざと違う答えや反対語を返してきて、学生の思っていた通りに進まなかった。学生は、その原因を考えながら、他のペアの模擬実践や、実践をしっかりと見て、学んだ。そして、初回の実践でうまくいかなかった原因は、人前に出ることの苦手意識にあったのではないかと考えた。その学生は、最後の実践で、最初の実践クラスへの変更を希望した。人前に出るのが苦手で、しかも、実践で子ども達の反応に落ち込んでいた学生が、うまくいかなかったクラスでの実践を希望したことで、その意識を克服できたのである。

最後の実践では、まず、子どもたちと目を合わせるよう心掛けた。すると、子どもたちの笑顔を見ることができ、自分も自然と笑顔になり、子どもたちと楽しい時間を過ごすことができた。

最後の記録には、「今でも人前に出る事は得意ではないが、少しは自信がついた」といった内容を記している。

このようにして、多くの学生に、「読み聞かせの実践」を通して、人前に出ることへの意識の向上が、はっきりと見られるのである。

## 3) つなぎも含めた「読み聞かせの実践」

前項に出てきた「つなぎ」とは、絵本と絵本の間

の小休憩という位置づけだった。しかし、年々、子どもたちは、つなぎを含めて読み聞かせを楽しんでいることがわかってきた。一方、学生にとって、限られた時間の中で、つなぎに何をするのかを、考えるのは難しい。

そのため、多数のペアが、子どもの年齢を問わず、「はじまるよ はじまるよ」に始まり、「むすんでひらいて」「とんとんとんとんひげじいさん」など、同じ内容のものを、取り入れる傾向にある。また、手遊びだけでは、子どもたちに楽しんでもらえないと考え、クイズ等の工作に時間をかけ、せっかく作ったものを生かしきれずに終わってしまうペアもいる。

絵本の読み聞かせもつなぎも合わせて、まるごと実践である。どちらも大切にしてほしい。今後のつなぎの方向性について後述する。

## 6. 今後の可能性～つなぎとしての「わらべうた」の提案

おはなしレストラン10か条の8条の中に、「お互いの意見や考えを率直に出し合ってよく話し合う」、「つなぎの歌や手遊びは、ペアの二人の息が合うまでしっかり練習する」という項目がある。「絵本の読み聞かせ」「つなぎ」すべてが実践であり、子どもと心をつなぐ大切な時間・空間である。とはいえ、多くの情報の中から子どもの発達年齢を考えて、つなぎの内容を考えたり調べたりできる学生は、少ない。普段、小さい子どもと関わることの少ない学生に、それを求めるのは難しいのかもしれない。学生が、主体的につなぎを考える手掛かりとなる、具体的な手立てをスタッフが示してはどうだろうか。

そこで、覚えやすく子どもになじみやすいつなぎとして、「わらべうた」の導入を提案したい。「わらべうた」は、子どもの遊びや生活の中で生まれ、歌い伝えられてきたものといわれている。子どもの共感度は大きいと考える。「わらべうた」のよさとしては、①日本の慣習や文化などに触れられる。②地域の特色がある。③生きていくために必要な知恵が詰まっている。④子どもの声帯に無理のない、半音のない5音階（ラドレミソ）が多い。⑤リズムは2



拍子か4拍子が多く、歌や動作に合わせて拍をとりやすい。⑥人と人との関わりなくして遊べない。(社会性) ⑦繰り返すことで、遊びが安定する、などが挙げられる。

近年、「わらべうた」のよさが、あちこちで取り上げられている。絵本になるものも増えてきている。絵本とあわせて、ぜひ子どもと向かい合って、じっくり、遊びとしての「わらべうた」も共有したいものである。

実践の中では、絵本の読み聞かせの流れの中でのつなぎとなるため、「わらべうた」の内容は絞られてくる。しかし、季節のものや生活に根ざしたものなど、子どもと楽しめる遊びは豊富にある。ぜひ、この機会に、郷土の「わらべうた」も取り入れたい。まずは、スタッフが、毎回授業の中で紹介し、一緒に遊び、学生自身に「わらべうた」を心と体で感じてほしい。あわせて、参考図書の紹介も行うなどして、意欲喚起につなげたい。

みんなが自然と一つにつながり、笑顔になれるのが「わらべうた」の最大の魅力だといえる。学生にとっても、日本の豊かな「わらべうた」に出会い、一緒に遊ぶことで、子どもの発達を見る(知る)ことができるのも、これからのよい学びになると考える。

## 7. おわりに

「読み聞かせの実践」という授業は、対象に合った絵本を、上手に読み聞かせることだけを教える授業ではない。何歳にはどんな本をどう読むべきか、という正解もないと考えている。学生たちは、絵本とはどういうものか、読み聞かせとは何かを考え、自分と、子どもという存在を見つめ直すことで、その時々自分が読む本を見つける。そして、楽しみながら実践を重ねることで、選ぶ力、読む力などの知識・技術を身につける。また、読む・読んでもらうという関係を超越して、誰かと一冊の絵本を共有したという実感は、大きな喜びになる。また、いろいろな立場の人に支えられながら、読み聞かせをすることは、確かな社会性を身につける手立てとなっていることを再確認した。

授業で行う実践の回数は限られている。授業終了後、学生が読み聞かせをする機会も、あるかどうかは分からない。しかし、読み聞かせをする喜びを知った学生は、どこかできっとまた絵本を開くに違いない。

「おはなしレストラン」の取組開始から10年の間に、たくさんの変化があった。「読み聞かせの実践」においても、対象となる学科・開設時期・スタッフの交代など、いくつもの緩やかな変更点があった。さらに平成30年度には、当松江キャンパスの四大化という、大きな局面を迎える。状況に合わせて、様々な調整が必要になってくるだろう。

一方、「おはなしレストラン」の学生の読み聞かせを聞いて育った児童が、成長してこの授業を受講するという、うれしい循環が始まっていることに、この10年の重みを感じる。

変わりゆく時流の中で、これからも「おはなしレストラン」の理念を根幹として、変えていくべき点、変えてはならない点を考え、スタッフそれぞれの知識・技術・経験を活かし、「読み聞かせの実践」のあるべき姿を模索し、実りある授業を目指していきたい。

## 注

1) おはなしレストランの教育活動については、以下を参考にされたい。

マユアキ・岩田英作 (2007) 「学びの仕掛けとしての『読み聞かせの実践』—小児病棟におけるボランティア活動からのはじまり—」 島根女子短期大学紀要

マユアキ・岩田英作 (2009) 「読み聞かせ活動を通した<交流力>の育成」 島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要

岩田英作 (2012) 「おはなしレストランライブラリーの取組—読み聞かせ活動を通した地域との交流拠点として—」(『近代文学試論』50号、広島大学)

2) おはなしレストランライブラリーの蔵書は、開館時：H22年4月1日学内開放スタート時、現在：H28年12月31日時点のデータである。

## 参考文献

畑玲子・知念直美・大倉美代子『幼稚園・保育園の  
わらべうたあそび 春・夏』(1994年、明治図書  
出版)

畑玲子・知念直美・大倉美代子『幼稚園・保育園の  
わらべうたあそび 秋・冬』(1995年、明治図書  
出版)

たかぎとしこ『わらべうたでいきいき保育 一年中

うたって遊ぼう「いろはにこんぺいとう」』(2009  
年、明治図書出版)

木村はるみ『CD付き すぐ覚えられるわらべうた  
あそび』(2010年、成美堂出版)

たかぎとしこ『わらべうたですくすく子育て みんな  
いっしょにうたって遊ぼう「うめぼしすっぱい  
な」』(2012年、明治図書出版)

(受稿 平成29年1月23日, 受理 平成29年2月7日)

